

建築を着る

—銀座のウラとオモテを縫うまち宿—

21819004
指導教員

伊東 知夏
宮 晶子 准教授

身体感覚	キネステーゼ	裏返し
銀座	まち宿	路地

1 背景と目的

建築と身体が接触しているのは靴を履いた足だけであり、建築と触れているのはその足先だけである。しかし、建築は人の肌にまとわりつくような、触覚的で、皮膚で感じるもののように思えるときがある。

人間と建築の間にあり、活動を生む空間のことを余白と呼ぶが、空間の余白は身体性には関わらないと感じた。では、身体性に関わった人間と建築の間とはなんだろうか。我々の身体と近く、触覚的に感じられる最たるものは衣服である。衣服的な体験を内包する建築を考えることで、身体性に迫った空間を創造できるのではないだろうか。身体という共通言語を軸にした、身近で普遍性を持った建築を模索する。

2 衣服のような建築

鷲田清一氏が述べているように、私たちは誰も背中や後頭部、自分の顔を直接見ることができないため、自分の身体については常に部分的な経験でしかない。そんなばらばらな身体知覚は、ある1つの想像的な「身体像」を繋ぎ目としたパッチワークにより、了解される。想像でしかない自分の身体像は脆く、すぐに揺らいでしまう。衣服を着ることは機能的な保護だけでなく、見えない身体の輪郭を布地との接触感によって浮かび立たせる。それによって不安定な身体に少しの実感を与えている。

身体に触れることによっておぼろげな身体感覚を補完する衣服のような経験を、身体から離れている建築にもつくり出すことを考える。

・キネステーゼ

一般に西洋のファッションにおいて、衣服の形状はその制作に伴う精巧な仕立てによって決定されることが多い。しかし、日本のドメスティックブランドの衣服は、身体を包み込む織物という日本的伝統から引き出されている。このことが布地と身体のあいだの柔らかく有機的な関係性を可能にし、そこで衣服は身体の運動に反応して絶えず形状を変化させている。つまり、身体と衣服の間に空隙を設け、身体が動く感じを意図して生み出している。これによって逆に身体を自覚する。哲学者であるフッサールやメルロ＝ポンティはこの「動く感じ」を「キネステーゼ」と呼んだ。

日本のデザインは、西洋ファッションにおいて見られる、フィットした衣服によって拘束される身体ではなく、さまざまな身体運動を考慮に入れている。衣服は運動におけるキネステーゼ的感覚を喚起し、これらの衣服の形態は静的な視覚的表象としてではなく、衣服に住まう身体によって絶えず再形成される動的な存在であると考えられる。



写真1 日本のモードファッション

建築は衣服と異なり、すでに身体との間に隙間を大きく持っているため条件は異なるのだが、身体と建築間にあるキネステーゼが働くことでそこに建築との相互作用が生まれ、建築と身体の一部感（補綴性）を生むのではない。

・オモテ/ウラ/裏返し

服の中を内部とする場合、裏返しの服を着た際、身体は内部なのか外部なのか。外部と内部が同じテクスチャのRC打放し建築は室内にしながら外部に身を置いているのか。このように内/外、表/裏の考え方は非常に曖昧であり、ふとした瞬間に入れ替わる。身体を包んでいた服のオモテが裏返って、いつもは露出しており意識の中心である頭部を包み込み、逆に身体は露わになる、衣服を脱ぐあの瞬間に感じる感覚に近い違和感が生じる。

・斜め

斜めは移動を意識化させ、人の身体感覚に訴える構造であると建築家クロード・パラン氏は、述べる。斜めの床や壁のある建築に包まれると、水平垂直の空間よりも筋力を使う。また、斜めの空間は方向感覚を失いやすく、「斜め」を目で触るように、より意識的に身体を使うことになるだろう。したがって、「斜め」は身体を意識させ、触覚的な空間体験を喚起させると言えるのではない。

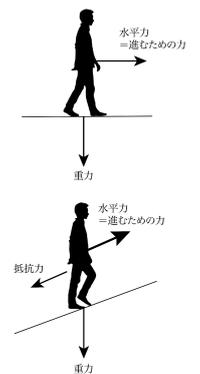


図1 身体感覚の覚醒

3 設計提案

本設計では銀座の敷地を3つ選定し、まち宿を設計する。

・銀座

銀座は人々で賑わう大通りや江戸情緒を残す裏通り、それらをつなぐ細い路地が存在する。角を曲がると景色が一変し、裏と表が反転する瞬間がある。裏返った街は対象化されず、裏通りや路地は内在的である。

外だと思っていたものが裏返って、急に内になる。それによって、自分が内と外のどちらに属しているのかわからない境界線の狭間で宙吊りになっている感覚は衣服を脱ぐ瞬間のようである。そんな衣服のようにウラとオモテがある銀座を縫うように設計することで、より身体的な体験ができると考えた。

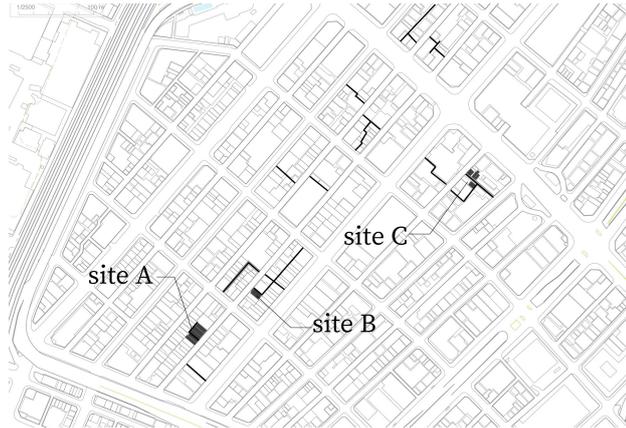


図2 対象敷地と路地

・銀座の空きテナント

銀座は高級感あるファッション、飲食で日本のトレンドを牽引してきた。昼の中央通りを歩いているのはインバウンドの来街者ばかりで、日本人をあまり見かけないほどであった。しかし、新型コロナウイルスが蔓延してから、インバウンド客がほぼ100%失われ、緊急事態によって日本人の来街者も激減した。銀座の多くの店舗は極めて厳しい状況に置かれ、現在では路面で約1割、空中階で約2~3割の物件が空き店舗になっている。

・銀座のホテル

銀座には客室数が100を超える大型のホテルが多く存在し、その高層階の客室のほとんどが夜景を売りにしている。地上の路地とは無縁であり、ウラの存在に気付かせぬかのように、綺麗なオモテの部分のみを切り取った部屋が箱詰めさせている。

・アルベルゴ・ディフーズとまち宿

「アルベルゴ・ディフーズ」とは、イタリア語で「分散したホテル」という意味である。まちの中に点在している空き家をネットワークさせてひとつの宿として活用し、町をまるごと活性化しようというものである。このような取り組みは日本でも地方創生として行われ、

「まち宿」と呼ばれている。まちの中にある日常を最大のコンテンツとし、利用者には地域固有の宿泊体験を提供する。この仕組みは、近代以前の日本本来のツーリズムに近いものであり、宿場町では、泊まる場所、食べる場所、お風呂に入る場所、など様々な要素が集まって構成され、街道沿いに連続していた。

都会である銀座で、ウラを縫うようにまち宿をつくることは、かつての多様な宿泊体験を現代に呼び戻すと共に、観光客が知らなかった銀座の重層的な魅力を伝えるという意義を見出せるのではないかと考える。

・これからの旅のあり方

近年、パックの団体旅行よりも個人旅行を好む人々が多く見られる。実際、観光庁が発表している調査では個人旅行はこの20年ほどで徐々に増えてきている。これは世界的に見られる傾向であり、旅行者たちの目的は「観光地をめぐること」ではなくなっていることが推察される。訪れたその地に短期間であるが「住まう」ことにより、その地の一員となり、文脈を読み取ることを価値として旅をする人々が増えているように思える。

・まち宿のプログラム

レセプションや客室がそれぞれ異なるビルに存在している。食事はまちの飲食店、入浴は古くから続く銭湯である「金春湯」や「銀座湯」を利用することを想定する。

4 設計手法

境界線の狭間で宙吊りになっている感覚を表と裏の連続によって誘発させる。客室までの動線は路地も利用し、まちのウラとオモテを意識させるものとする。客室内には帯状の壁が室内を縦横無尽に巡る。その連続的な壁により、オモテの中のウラ、ウラなのにオモテが現れ、建築体験の重ね着や着脱といった衣服のような身体的体験を可能にする。



図3 コンセプトモデル

【参考文献】

- (1) アニエス・ロコモラ、アネケ・スメリク(編) 蘆田裕史(監訳) 『ファッションと哲学 16人の思想家から学ぶファッション論入門』フィルムアート社 2018年発行
- (2) クロード・バラン(著) 戸田穰(翻訳) 『斜めにのびる建築—クロード・バランの建築原理』青土社 2008年発行
- (3) 鷺田清一 『ちぐはぐな身体—ファッションって何?』筑摩書房 2005年発行
- (4) 井上雅人 『ファッションの哲学』ミネルヴァ書房 2020年発行
- (5) 小宮山照 『膨らむ身体 身体の空間表象—現代舞踊・映像・小説そして建築と都市』せりか書房 2018年発行